



2022年2月19日

森と海の自然科 活動案内

「西宮市貝類館・笹部さくら資料館・宮水井戸・西宮神社」

個人二人が収集した世界の貝の標本を基礎に設立された西宮市貝類館、白鹿記念酒造博物館に併設されている「桜守」笹部新太郎の資料館、灘五郷の酒を日本酒の冠たる地位に引き上げた「宮水」の井戸群、海からやってきたエビス神を祀る西宮神社という兵庫県西宮市の4箇所を、公共バスと徒歩で訪ねます。

(A グループ《海》福嶋昭治)

記

1：日時 2022 年3月24日（木）

2：集合 10時30分 阪神「西宮」駅 戎 口改札(神戸寄りの階段・エスカレーターで改札階へ)

3：持ち物 飲み物、弁当、雨具など。【雨天中止】可否は、前日午後7時までにメールで連絡します。

4：行程 10:38「西宮南口」《阪神バス》10:55「マリナパーク南」——11:00西宮市貝類館(学芸員の解説・見学)11:40——11:45海辺の道公園(昼食)——12:28「マリナパーク南」《阪神バス》12:40「交通公園前」——12:50白鹿記念酒造博物館(笹部さくら資料館)13:40——13:50 酒造各社宮水井戸群14:05——14:20西宮(えびす)神社15:20——15:30 阪神「西宮」解散 *バス以外の行程は徒歩

5：費用 貝類館 200 円(20 名以上の団体 160 円)。白鹿記念博物館 500 円(20 名以上の団体 400 円)。

バス料金 $220 \times 2 = 440$ 円。



①西宮市貝類館 1999 年開館。日本の貝類学の基礎を築いた黒田徳米、医業の傍ら世界の貝の収集・研究をした菊池典男の標本を収蔵・展示。建物はヨットの帆をイメージした安藤忠雄の設計。堀江謙一のマーメイド4号を中庭に展示。

③白鹿記念酒造博物館 日本の酒造りの歴史と文化を後世に伝承することを目的として、清酒「白鹿」醸造元の辰馬本家酒造が 1982 年に設立。付設されている「笹部さくら資料室」では桜の研究・保護・育成に人生の大半を費やした笹部新太郎が収集した桜に関する資料(西宮市より寄託)を展示。

笹部新太郎 1887 ~ 1978 大学法科在学中から独学でサクラの研究を始めその後の生涯をサクラの育種・保

護の研究と実践に費やした。1960年御母衣ダム（岐阜県大野郡白川村）の建設により水没する推定樹齢 450 年の 2 本のエドヒガン（^{みぼろ} 莊川桜）の移植に成功したことはよく知られている。大阪造幣局の通り抜け、奈良県吉野、兵庫県西宮市夙川公園ならびに甲山周辺など、各地で桜の管理・指導を行った。水上勉の小説『櫻守』の主人公である北弥吉の雇い主の竹部庸太郎は笹部新太郎の翻案。小説では、直接の主人公ではないが、竹部庸太郎と北弥吉二人を描き分けながら笹部新太郎という人物の「櫻守」としての生涯と「思い」が描かれている。その研究・演習林である『^{えきらくさんそう} 亦楽山荘』（兵庫県宝塚市武田尾駅付近）は、4 月の例会「福知山廃線を訪ねて」で訪ねる予定。



御母衣湖畔の「莊川桜」

④宮水 天保 8 年 1837）一説には天保 11 年（1840）、西宮と魚崎に造酒蔵を持っていた櫻正宗六代目の山邑太左衛門が、西宮の蔵で造る酒のおいしさは使用する井戸水の違いであるということを発見。「西宮の水」が省略されて「宮水」と呼ばれるようになった。宮水は、カルシウム、カリウム、リン、クロール等のミネラル分を豊富に含む硬水で、かつ酒造りが嫌う鉄分が少なく、わずかに塩分も含んでいる。深さ 2 m から 5 m の浅井戸で、西宮市内の僅かに 500 m 四方の地区で今なお汲み上げられ続けている。周辺地域の開発に伴い、宮水の水脈を守るために西宮市は「宮水保全条例」を 2018 年 4 月から施行している。



宮水が湧き出る500メートル×500メートルの区画に名門酒蔵の井戸が集まる



⑤西宮神社 国道四三号の北、阪神西宮駅の南西に鎮座。第一殿に主神の西宮大神（蛭児神）、第二殿に天照大神・大国主神、第三殿に須佐之男神を祀る。通称西宮^{えびす} 戎。全国戎社の本社とされ、商売繁盛の神として信仰を集める。旧県社。平安時代後期頃より、現社地に^{ひろた} 広田神社の別宮^{なん} 南宮（梁塵秘抄）とよばれ、その境内の一小社として戎社が祀られ、^{えびすきぶろう} 戎三郎殿ともいわれた。

伝えによると鳴尾の漁師が網にかかった神像を海に捨てたが、翌日、捨てたはずの像が再び網にかかったため家に持帰って祀った。その夜の夢に戎神の託宣があり、神意によって鎮祭したのが現在の戎社であるという。（『日本歴史地名大系（兵庫県）』平凡社）

^{ひろこ} えびす（蛭児神）信仰の変遷 西宮大神（蛭児神）神は、『古事記』『日本書紀』では、国生みの神であるイザナギ・イザナミの子として生まれたが、三歳になっても脚が立たなかったので海に流されたとある。西宮には、昔蛭児神の像が西宮の海岸に流れ着き、それを祀った場所が現在の西宮神社であるという伝承がある。えびすが海からやってきた漂着神・渡来神という捉え方をされていたことがわかる。米山俊直は「えびす信仰の三源泉：海神・市神・福神のルーツとその融合」（2001）で、えびすには海、市、福の神としての三つの起源があり、変遷しつつ融合、信仰が拡大されてきたと述べている。